

会 議 記 録

高松市附属機関等の設置、運営に関する要綱の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会 議 名	第 3 回高松市総合計画審議会
開 催 日 時	令和5年 9 月 1 9 日（火） 18時30分～20時
開 催 場 所	高松市役所防災合同庁舎 3 階 3 0 1 会議室
議 題	（ 1 ）次期高松市総合計画の名称と目指すべき都市像について （ 2 ）次期高松市総合計画の策定経過と令和 5 年度行政評価結果について （ 3 ）次期高松市総合計画基本構想案について・グループディスカッションによる検討結果について （ 4 ）その他
公開の区分	■ 公開 □ 一部公開 □ 非公開
上 記 理 由	
出 席 委 員 （23名）	赤崎委員、伊藤委員、大美委員、笠井委員、喜田委員、木村委員、糸井委員、国東委員、久保委員、佐野委員、城下委員、田口委員、佃委員、角田委員、豊田委員、中村委員、中橋委員、野田委員、日笠委員、古川委員、星野委員、真鍋委員、森田委員
傍 聴 者	5 人 （定員 1 0 人）
担当課及び 連 絡 先	政策課 839-2135

会議の経過及び結果

（ 1 ）次期高松市総合計画の名称と目指すべき都市像について

（委員）

「人が集って、躍動し、世界が注目する都市になる」という起承転結は理解でき、ビジョンはあまりこまごま説明しなくても、分かりやすいものである必要がある。

（委員）

今回初めて「未来」や「世界都市」という言葉が新たに入ってきた。高松をより世界に広げていこうという思いが伝わってきたので、良い都市像だと感じた。

（委員）

確かに広がりがあり、未来に続くというイメージはつく

が、「世界都市」は何をもって「世界都市」なのかが分かりにくい。

グローバルから選ばれるのが「世界都市」なのか、グローバルに対して展開していくのが「世界都市」なのか、これではどちらをイメージしているのかが伝わってこない。

総合計画の基本的な考え方で「選ばれるまちづくり」を掲げており、「世界から選ばれる」と理解したが、よくよく読むと違うような気もするので、趣旨を説明してほしい。

(事務局)

本市にたくさんの方が訪れ、元気なまちになっていくと、好循環が生まれて、市民もまちに誇りを持ち、愛着を感じ、住み続けたいと思うようになる。

暮らす人、訪れる人、それぞれが Well-being な心地よさを感じるとき、国内外から注目される都市、それを「世界都市」としている。

行政だけではなく、民間企業や市民と連携しながら、元気なまちを創ることで、その結果、国内外から「高松はいいよね」「高松は素晴らしいね」と注目されれば、選ばれるまちになるのではないかという想いを込めている。

(委員)

この都市像が、総合計画の基本的な考え方にリンクすれば、もっとつながっていく。個々のパーツの中ではまとまっているが、連動しないと、総合計画としてはあまり意味をなさず、それぞれの自己満足に終わるのではないか。次につながっていくことが明確になるような言葉が入っている方がよい。

(委員)

まちづくりとは、すなわち、人が集まって、活動することだ。本市が直面している、人口減少、子育て、共生社会などのそれぞれの課題を解決していかなければ、目指すべき都市像を実現できない。

出生率の向上に向けて、妊娠・出産に対する費用補助など、子育て支援はしっかりと行われているが、バラマキ政策で終わるようでは困る。

地域、社会、企業などが連携し、子育てしやすい仕組みづくりを構築していくこと、本市として、子育てに関する予算をどう確保していくかを考えていかなければならない。

(会長)

基本的には、予算が子育て世代に行きわたるようにしていくことが重要であり、子育て世代の人たちと、それを応援する人たちが何を求めているのかをとらえていく必要がある。

(委員)

日本の人口はこれからどんどん減っていく中、様々な政策

が検討されており、その中で、県や市はどの程度の人口規模を目指していくのか。

(事務局)

令和2年3月に「たかまつ人口ビジョン」を策定し、当時の国勢調査の人口推計に基づいて将来予測を行った結果、本市としては、2060年に38万人程度を目指すとした。

次期総合計画を策定するに当たり、人口減少社会に対応する政策だけでなく、人口減少を抑制する政策を積極的に実施することで、人が集うまちにしていきたい。

市外、国外から訪れてもらうだけでなく、本市の出生数が増えるような取組も拡大していきたいことから、このような都市像を掲げている。

(委員)

目指すべき都市像の説明文はとてもよく練られているが、「高松」という固有名詞を省くと、どこの市町村にもあてはまるものになっているのではないかと。固有名詞を入れることで、高松の個性を出し、高松という地名がなくても、読む人が高松のことだと感じられるものにしていただきたい。

(委員)

「世界都市を目指します」という結論だが、何をもって「世界都市」なのかという定義がないと分かりづらい。「世界都市」の定義があったとしても、「世界都市」になれば他はよいのかということもある。

例えば、観光客が増えただけでは「世界都市」と言わないと考えるので、都市像としての「世界都市」が分かりにくい。これまでは「瀬戸の都」がよく使われていたが、「世界都市」という文言は外したほうが良いのではないかと。

(委員)

「世界都市」という文言は、少しオーバーではないかと。

(会長)

「世界都市」をどのようにとらえていくのか、インターナショナルシティというキーワードをどう見ていくのかについては、いろいろな考え方があると思うので、十分な議論が必要だ。

(2) 次期高松市総合計画の策定経過と令和5年度行政評価結果について

意見なし

(3) 次期高松市総合計画基本構想案について ・グループディスカッションによる検討結果について

【まちづくりの目標 1】

(委員)

政策「1 子どもが健やかに生まれ育つ社会の形成」については、出生数が減っている中で、子育て世代だけではなく、様々な人が子育てに携わることができる機会を作ることが必要ではないか。

支援についても、これまでのように専門家だけが行うのではなく、社会の中でお互いに支え合い、向き合う機会を作ることや多世代交流・異分野交流が欠かせない。

政策「2 支え合う福祉社会の形成」については、超高齢社会の中で、高齢者が元気で暮らすため、また、子どもは健やかに成長するため、高齢者と子どもの交流の場づくりが必要である。

【まちづくりの目標 2】

(委員)

この目標は非常に重要で、時間の経過とともに内容が変わるものではない。

まずは、政策と施策のロジックが成立しているか、構造がアンバランスになっていないかを確認した。

主体が行政なのか、行政のサービスを受ける市民なのか曖昧で、文章を読んだ時に、「誰がどうする」という点がぼやけてしまっている表現がある。

また、修飾語など、きれいな表現が使われているが、曖昧な表現が多い。

市民を対象にアナウンスすべきものの中に、情緒的な表現や人によって解釈が異なる表現が多いという印象である。

全体的にまとめづらいということも理解できるが、できあがった文章は、角が取れた丸い表現になっているので、少しチャレンジングな内容も盛り込んで、市民に刺さるような文言が入ればよかったのではないかと印象であった。

何のための、誰のための総合計画かがもう少し明確になれば、表現の課題もクリアできて、何ができていないかも分かる。表現をブラッシュアップしていただきたい。

【まちづくりの目標 3】

(委員)

商工業、企業誘致についても、人材不足が非常に大きな問題になっている。いかに人材確保に取り組むかが重要であり、また、ワーク・ライフ・バランスを実現しようとする、更に人材不足が加速していく。交通業界でも人材不足が顕在化しており、全体的な方向性として、後継者不足という問題の解消や事業承継支援を積極的に実施すべきである。

次代を担う若者をどうマッチングする仕組みをつくるかが大事である。

先ほど「世界都市」の議論があったが、私の考えでは、「世界に誇れるまち」というイメージで、今後この10年間で取り組んでいただきたい。

インターネット、SNSの時代を迎えて、本市の魅力をどうPRしていくか。そのためにはインフルエンサーの活用もしていくべきである。

施策「2-2 観光振興と交流の推進」で最も強調したいのは、1年半後に県立アリーナができることである。G7大臣会合も本市ですでに2回開催されており、更に「世界に誇る都市」を目指したいということで、県立アリーナを基軸とし、高松城の復元も視野に入ってくる。本市は、日本一のウォータースタジアムを有し、バックに瀬戸内海がある。そのような表現を入れながら、それを目指していくこととしていただきたい。

政策「2 地域活力の創造」では、さぬきうどんのように、市民が地域の価値を再認識して、シビックプライドを醸成する、「自分のまちはいいまちだ」と言えるような取組を進めてもらいたい。G7大臣会合のように、MICEの誘致を更に進めて、地域の振興を図るべきである。

政策「3 文化芸術・スポーツの振興」では、本市は、スポーツを行う素地が大きく、それを活用した取組がさらに必要であるため、民間施設や資源を一層活用した方が良い。

健康増進に向けた生涯スポーツに関わる機会の更なる創出を進めていただきたい。

(委員)

教育、医療、福祉、全て財源が必要になる。財源確保には税金が必要で、そのような意味でも、やはり経済が大事である。

これからは人口が減っていくので、これまでと同様に財源が確保できなくなることも考えられるため、経済政策をしっかりと総合計画にも書き込んでいただくことが大事である。

人口が減少するとパイが小さくなるので、外貨を稼ぐ必要がある。国も観光立国を目指しており、その点も強く盛り込んでいただきたい。

(委員)

シビックプライドの醸成については、「世界に誇れる」というのではなく、結果的に世界に誇れたということになるのではないかと。

市民一人一人が「高松に住んでよかった」「自分は高松出身だ」ということを誇りに思えることが大事で、そのニュアンスを正確に認識していなければ、目的と手段が逆転する。

将来的に人が帰ってくる状態にするには、各自の心の中にシビックプライドがなければならぬ。その点について合意形成した方がよい。

(委員)

人生100年時代と言われているが、身の丈に合った生き方、多様な生き方があるのではないかと。

企業や社会でも、制度や政策がどんどん変わってきてい

る。

高齢期を無事に生きるには、学び直すことが非常に重要であり、第2の義務教育的なものを提唱し、高齢者が新たな知識を身に付けるための取組が重要である。

【まちづくりの目標4】

(委員)

セーフティネットは行政に委ねる部分が多い項目だという議論の中で、超高齢社会において、共助・自助をどう盛り込むか、また、高松市の計画なので、高松市固有の課題は何なのかにも話題が及んだ。

生活衛生の中で、犬猫の殺処分の割合が高いのが香川県の特性であるため、殺処分をどのように減少させていくのか検討することが必要である。

少子化が進む中で、自主防災組織の組織率が低下しているほか、消防、特に消防団の定員割れがみられる。また、女性の防災組織ももう少し評価をしていかなければならない。

消費者トラブルに巻き込まれることも、高齢者だけではなく若者でも増えているので、これも公助に頼るだけではなく、地域の中での見守り強化が必要である。

少子・高齢化の中で、財源の確保が難しく、公共施設・社会基盤の老朽化への対応については、しっかりと考え、環境整備に取り組んでいかなければならない。

独居世帯が、今後も増えていくことが予測される中で、災害発生時に公助が中心ではあるが、共助・自助のまちづくりをどうしていくかが大事である。

【まちづくりの目標5】

(委員)

まず課題について、都市空間に関しては、衰退する郊外部の商店街や空き家対策、都市交通に関しては、過度な自動車依存や公共交通サービスの向上、脱炭素社会に関しては、SDGsの市民に対する啓発が挙げられた。

次に3つの政策の方向性について、「1 機能性の高い都市空間の形成」に関しては、本市はコンパクトシティを推進しているが、持続的なまちづくりという長期的なビジョンのもと、空き家の対策、対応といった土地の利活用という具体的な方策を検討する必要がある。具体的には、瓦町駅周辺だけではない駅周辺の活性化が、中心市街地活性化の観点から重要である。

「2 交流・連携を支える都市交通の充実」に関しては、現状は市民が自動車に依存するライフスタイルであり、環境負荷低減のためにも、公共交通機関やレンタサイクルを始めとする自転車の利活用を推進する必要がある。交通事業者だけではなく、地域住民とも連携を図りながら、それぞれの地域に合わせた効率的で持続性の高い交通網を整備していくことが求められる。

「3 環境と共存する脱炭素社会の実現」に関しては、ゼロ

カーボンシティを推進していることもあり、より多くの市民が環境問題について自ら考える、脱炭素ライフスタイルを普及していく必要がある。

日本でも SDGs や脱炭素の取組が加速しており、7月には、環境省から脱炭素につながる新しい国民運動がスタートしたが、本市としても、再生可能エネルギーの普及促進やゼロカーボンシティの実現に向けて、市民と共に取り組んでいく必要がある。

(委員)

まちづくりの目標「都市機能と自然が調和し、快適さと利便性を兼ね備えたまち」について、利便性は非常に分かりやすいが、快適さは分かりにくい。何をもちて快適とするのかが分かりにくいので、この文言を盛り込むのはいかがなものかと感じた。

(会長)

少し長いので、その点も含めて検討されるとよい。

【まちづくりの目標6】

(委員)

まちづくりの目標6は、地域コミュニティ、参画、協働、NPO、自立的で推進力のある行財政運営というところで、スマートシティやデジタル化をキーワードとして議論を進めてきた。

地域や地域の人材が担うことを期待される部分は、どの政策・施策の中でも共通しており、今後一層、頼らざるを得なくなるだろうと考える。

一方で、地域に目を向けると、地域コミュニティはかなり疲弊しており、弱体化している。

その上で、今後何が必要かについて検討したところ、地域コミュニティにおいても、地域コミュニティ協議会でいえば、44協議会中41協議会は任意団体だが、法人化も視野に入れながら、今後世代交代を進めたり、行政サービスの一部を担うことが期待されたりという中、ガバナンスが効いた組織体になることが必要になってくる。

非営利団体についても同様で、地域を担う主体として、ガバナンスの効いたNPO等の育成が急がれる。

行財政の運営に関しては、デジタル化やスマートシティを進めていくべきだが、その傍らではデジタルデバイドへの対策に取り組みながら、デジタル化やスマートシティの推進による市民に対するメリットをしっかりと見せていくことが重要である。

行財政運営の基盤強化に関しては、人口が減ると税収も減るという前提で、効率化を進めながら、同時に優先順位をつけて、必要な施策に必要な予算をつけることが重要である。

全体的な視点としては、この分野についても成果指標が必要になるのではないかと。それもしっかりと定めながら目標に向

かうことが必要である。ただ、人が何人集まったから良いという視点以上のものが、特にこの分野では必要になるのではないか。

(委員)

「さまざまな主体がつながり、ともに力を発揮できるまち」はスローガンで止まっている。さまざまな主体が集まって何ができるのかを明確にしないと目標にはならない。「価値を創造する」という趣旨の文言が盛り込まれると、ある程度実行のニュアンスが出てくると思う。

(事務局)

次期総合計画基本構想38Pで、どのような主体がつながって、どのように力を発揮していくかを、全体としてお見せする形になっている。ただ、タイトルとして、もう少し分かりやすい表現にしてほしいという趣旨の御意見と思うので、検討させていただく。

(会長)

全体についてご意見があればお願いしたい。

(委員)

これまで一番元気だった団塊の世代が75歳に近づいても、まだジムに通っていて元気だが、2030年代に入ると、全員が80歳代になっていて、状況が急変する。自助・共助も重要だが、公助としてセーフティネットにしっかり取り組んでいくことを示していただきたい。

最近の若い人たちは、スマホを中心に生活しており、彼らが本市を好きになって、世代交代ができるような状況になるかどうか重要である。

次期総合計画の8年間の前半4年間と後半4年間では、状況が大きく異なるので、その辺りを行政として認識してほしい。

(委員)

まちづくりの目標1(資料5 答申案に向けた素案)に「生活の質が充実して」という記載がある。これだけ生活が多様化している中では、「質」という文言をわざわざ入れなくてもよいのではないか。個々人の生活が充実しているだけでいいのではないか。

「生活の質」は、高度経済成長の中では画一的だったが、これだけ多様化してくると、質も多様化している。そのため、「質」という言葉が邪魔になるのではないか。

(委員)

まちづくりの目標6 施策「参画・協働の推進」について、NPOの方々に一生懸命取り組んでいただいているが、市民はなかなか自分事として捉えられず、活動をあまり知らな

いというところも多い。

持続可能な取組にしていくには、どんな活動をしていて、それによって地域がよくなっていることを情報発信していく必要がある。

行政がやるか、地域コミュニティ協議会がやるかは別として、ぜひ発信についても施策の中に入れていただきたい。

(委員)

まちづくりの目標 1～6までを聞いて、頷くことが多かった。その上で目指すべき都市像に戻ると、説明文も含めて、よくまとまっていると感じた。

(委員)

まちづくりの目標 1 政策「1 子どもが健やかに生まれ育つ社会の形成」の方向性について、高齢化に伴い、「子育てを通じた多世代の交流」「多様性のある子育てスタイル」が挙げられているが、それには子育て世代と、子ども自身の声や目線を通して、共生していける社会の形成が重要である。

(委員)

まちづくりの目標 1 政策「3 心身ともに健康に暮らせる社会の実現」の中で、健康でなければいけないということで、本市は健康都市推進ビジョンを基に各取組が進められている。その中に、健康寿命の延伸と生活の質の向上が掲げられているが、高松市民が元気で長生きできることを願っている「健康都市推進ビジョン」という項目が追加できないか。

(委員)

子育てや教育に関して、組織的なものは施策として盛り込まれているが、当事者である親世代、親が子育てや教育にいかにかにしっかり責任を持つか、教育の原点は家庭にあることなどを盛り込むべきでないか。

(委員)

本市が進めていきたいビジョンを打ち出すために、明るいイメージで作っていると思うが、入れすぎるとあれもこれもしなければならなくなる。予算にも限界もあるので、優先順位をつけるのは難しいが、絶対にやらなければならない部分と、そうでない部分を区別しないと、できないことまで「やります」といったミスリードを生まないかが心配である。

(会長)

人口減少社会においては考えなければならない課題である。盛りだくさんになりがちだが、将来「これはできない」となるとはいけないので、検討していただきたい。

(委員)

就労者の視点を入れていただきたい。

目指すべき都市像は、とてもよく考えられている。

(委員)

そもそもまちづくりは誰のためにやるのかを考えた場合、一番はそこに暮らす市民の視点が重要だ。その点、素案で議論されていることは、市民の視点をととても大事にしている項目が盛り込まれて、個人的にも良いと感じた。

目指すべき都市像についての議論があったが、「人が集う」や「世界都市」など、外からの視点が少し強いのではないかと感じたので、市民目線をもう少し盛り込んでよいのではないか。

(委員)

本市は、都市間競争に負けており、財政が一層厳しくなる中、何を優先して、何の施策を目玉として充実していくかが問われている時代である。

地域コミュニティに関して、44の地域コミュニティ協議会の活動は硬直化しており、若手のボランティア人材が不足している。自治会加入の促進も当然だが、ぜひ若手の人材育成も行政主体で行っていただき、地元のまちに愛着を持てる人材の育成をお願いしたい。

(委員)

私は、転勤等でいろんなところに住んだが、本市はとても住みやすく、災害も少ないなど、とても良いところである。いろんな意見があるが、本市の良いところをもっともっとブラッシュアップして、それを前面に出していくべきである。

(会長)

本日も議論いただいた内容を踏まえ、第4回審議会の答申案としてお示ししたい。

何のための計画かを考えることが大切であり、住む人の幸せにつながる事が一番大事である。

行政がやりやすいようではなく、行政は大変でも、本市に住む人たちが、少子化や人口減、超高齢化が進行する中でも、みんなが協力していける体制の中での計画であることが重要である。行政目線ではなく、市民目線の計画にできればよい。

また、何でも盛り込んでいいのか、将来的にはできなくなるということなら、ダウンサイジングしていく施策も検討していく必要がある。この辺りは今後の課題としていただきたい。

(4) その他について

(事務局)

次回は、10月16日(月)を予定している。

(閉会)

